

## ある脳障害児の例

幼児と漢字との関係について、こういうこともございます。昭和49年の夏、私は愛知県に住む方から、その長女の愛子という四歳五か月になる脳障害児の指導について相談を受けたことがあります。愛子ちゃんは、生後一年半くらいのときに、親のちょっとした油断からダンプカーにはねられ、頭蓋骨陥没という瀕死の重傷を負い、一か月の危篤状態が続いた後、奇跡的に助かった子どもです。しかし、その後遺症として、体が不自由、頭の働きが悪い、という子どもになってしまいました。それも重度の脳障害児ですから、学齢に達しても就学できません。それで、家で一所懸命になっっているいろいろ教えているのだけれども、たとえば「あいこ」の「あ」という字をまず読めるようにしてやりたいと思い、毎日根気よく教えているのだが、一年たっても覚える様子がない。そういう子だけれども、どうにかなるだろうか、という相談です。

実は、昭和49年の5月頃に、アメリカのグレン・ドーマン博士

が『親こそ最良の医師』という本を出版しました。それには「いかにして脳障害児を治療したか」という副題がつけられていて、そういう子どもを持つ親たちに非常に読まれたものなのです。その本に私のことが書かれていたものですから、石井なら脳障害児の治療ができるのではないかと考え、それで私に相談に来たらしいのです。

私は、「仮名を教えたってとても覚えられるものではない。しかし、漢字なら必ず覚えられる」と言って、次のような教え方を示してやりました。まず、子どもによくわかる内容の漢字を選んでそれをカードに書き、大きな声で三回読んで聞かせる。そしてそれと同じことを二、三分後に繰り返して行なう。さらにまた二、三分後にもう一度繰り返す。漢字を見せる時間は数秒間でいいのですけれども、このように、二、三分おきに三回繰り返してカードを読んで見せる。この繰り返しを一日のうちに五回やると必ず覚えます。そういうことを、愛子ちゃんの両親に教えてやりました。

この学習で、愛子ちゃんは一日にほぼ一字ずつ漢字を覚え

ていきました。「一週間に、足・耳・犬・猫・雨・鶏・舟の七字を覚えた」という、父親の歡喜に満ちた手紙を受け取ったときのことを、私は忘れることができません。正直言って、私もそこまでいくとは考えていなかったものですから、非常に驚きました。その後愛子ちゃんが二年間に覚えた漢字は三百数十字に達したといます。この数は、五、六年生が二年間に学習する漢字の総数に匹敵します。しかも、小学校では漢字学習には相当力を入れてやっているのですが、それにもかかわらず80点とれる子どもはいい方で、百点の子はなかなかいません。クラス平均が70点までいったらいい方です。それを愛子ちゃんは、二年間に三百数十の漢字覚えてしまったのです。実にすばらしいことだと思います。漢字を覚えることにおいては、頭のいい悪いはあまり関係ないのであって、私はどんな子どもにでも覚えられるものだと思っています。愛子ちゃんや、そのほかの実例によって、「人間は、誰でも漢字は覚えられる」と言っているのではないかと考えています。(詳細は第四巻参照)